

各キャンパス図書館めぐり



図書館でふと思うこと

生物理工学部 教養・基礎教育部門

特任講師 玉井 潤野 (Junya TAMAI)

昨2022年に近畿大学生物理工学部（和歌山キャンパス）に赴任した私は、新しい職場でのいわば「土地鑑」を培おうと思い、新年度の授業がはじまる前の三月下旬ごろ、これという当てもなくキャンパスを歩き回っていました。こう書くとどこか殊勝な心掛けのようですが、結局は私自身にとってもっともなじみやすい場所である図書館にたどり着き、生物理工学部では2号館3階にあるその図書館の前で、「自分はどこにいても変わらない人間なのだなあ」と苦笑したのです。

学生のころは京都で暮らし、その後イギリスに留学する前の数か月は地元に戻って、帰国してからは非常勤講師としてまた他県に赴くといったこの十年ばかりの生活を振り返ると、どうやら私は、慣れない環境にとびこむことによってどうしても生じてしまうストレスをやり過ごすために、図書館に通う癖があるようです。学生のころ、初めて英語圏に短期留学した時は、せっかく海外に来ているのだから現地の友人たちと観光でもすればいいものを、どういうわけか大学の図書館や市内の公共図書館に入り浸りの毎日を送っていました。バンクーバーやフィラデルフィアやロンドンの図書館に開館と同時に入り、午前中の読書や勉強が終わると近くのカフェでお昼を食べて、また図書館に戻り夕方まで本を読むという生活が、私の「留学」のほとんどすべてでした。帰国してからもそうなのですから、いよいよこれは私という人間の根幹に関わる性質なのでしょう。

さて、かつての私がそうであったように、生物理工学部の学生たちのなかには、学生生活全体のかなり部分を図書館で過ごす人が少なくないでしょう。それは端的に、本学部の立地のためです。キャンパス内に食堂やコンビニエンスストアがあるとは言っても、生物理工学部のすぐ外に、お昼休みに気軽に行け

るようなファミリーレストランやカフェ等々があるわけではありません。なんだかんだ言っても遊びたい盛りの学生には少々物足りない環境かもしれませんが、将来のためにとにかくしっかり勉強して知識やスキルを身につけたいという学生にはむしろ好適かもしれません。いずれにしても、豊かな樹々に囲まれた生物理工学部のキャンパスに通う学生たちにとって、例えば2時限目の授業と5時限目の授業のあいだの数時間を過ごせる「場所」が、どうしても必要になります。もちろん、そんな場所の第一候補が図書館です。それゆえ、ふと必要な資料を探しに図書館に行った私が書架のあいだを歩いていると、その先の自習用机に、ついさっき講義で見かけたのと同じ服装の後姿が目につくことも多く、彼ないし彼女の日々の生活の一辺に図らずも触れた気がします。図書館とは、書物の所蔵場所であるだけでなく、他にどこか行って行くあてのない人間が気兼ねなく立ち寄り腰を下ろすことのできる場所であり、そうであり続けるべきなのでしょう。

誤解を招かないように言い添えておくと、本学部のようにいわゆる商業施設等々から距離をとったキャンパスというのは、必ずしも例外的ではなく、まして不適當でもありません。学生時代のことを「モラトリアム」などと言うことは昨今では稀ですが、大学生として過ごす数年間が、大人と子どもの中間の、どっちつかずで、だからこそ大切な一時期であることに変わりはありません。ある種の共同体では、子どもが大人になるための通過儀礼として、子どもを一定期間隔離する風習があると聞いたことがあります。大人たちに守られている状態から、その大人たちが暮らす社会に参入するための準備期間を過ごすための空間として「大学」を捉えるならば、生物理工学部の和歌山キャンパスは、案外そんな「大学」のあるべき姿に近いのかもしれません。

研究者たちが暮らす大学など「象牙の塔」に過ぎない、と糾弾するひとびとは折に触れて出現します。しかし、そもそも大学は、一

般社会の趨勢とは良くも悪くも距離をとることができるところに価値があると考える人もいます。二十世紀後半でもっとも影響力をもった哲学者のうちの一人であるジャック・デリダは、あるインタビューのなかで大学についてこんな風に語っています。

デリダ 大学は遊ぶ場所、遊技場ではありません。しかし、大学のなかの少なくともある場所では——というのも、大学は同質な場所ではありませんから——、問題や束縛や目的志向型研究が他よりも、ルーズになっています。そのようなところでは、効果とか直接の効果を期待しないで、研究を進めることができます。まさに研究のための研究、試みのための試みができるのです。したがって、わたしの言う遊びの可能性が生まれるのです。

折しも、新型コロナウイルスのワクチン開発に決定的な貢献をした研究者がノーベル賞を受賞したことが報じられ、自分は賞のために研究していたわけではないという旨の発言も伝えられています。研究がいずれどこかで社会の役に立つことを避ける必要は全くないのですが、といっても、やはり研究は何よりも研究そのもののために、知的好奇心そのものに突き動かされてなされるべきなのだと思います。それはいわば、この上なく真剣そのものの戯れです。

いささか強引な類比に見えるかもしれませんが、社会にとっての「大学」と、その大学にとっての「図書館」とは、よく似ていると思います。学生が、将来なにものになることができるのか、とりあえずはそうしたことを考えずに過ごすことのできる場としての「大学」には、別にレポートを書いたり教科書を読んだりするわけではなくても、とりあえず空いた時間を過ごすことのできる「図書館」が必須なのでしょう。